公衆浴場とジェンダー
――揺れる性の境界

近年、SNS 上では、女性スペースの安全性に関する議論が盛んになっている。その一因としては、2023 年に施行された LGBT 理解増進法が挙げられる。この法律は性的マイノリティーに対する理解の増進を目指しており、内閣府では性的マイノリティー政策の連絡会議を設置している。しかし、法律には具体的な差別禁止や責任追及の要素が不足しており、一部の条文では問題が指摘されているという。特に公衆浴場に関しては、トランスジェンダー女性が公衆浴場の女湯に入ることへの是非など「女性スペースの安全性をどのように確保するか」という面の追求が不十分なのである。また、「性的マイノリティー向けの安全な空間をどのように提供するか」という面についても、さらなる議論が必要である。そこで本論文では、公衆浴場の文化と、性別に基づく公衆浴場での行動差を調査し、公衆浴場において安全な「性の境界」のあり方を追求していく。

本論文は、全四章の項目にわけられている。第一章では、ジェンダーレストイレなど女性スペースにかかわる問題の事例と、「性別」や「性的マイノリティー」の定義を明示している。そして第二章では、主に江戸時代から現代における公衆浴場の歴史を調査し、男女混浴だった公衆浴場が男女別の形態になった経緯や、各家庭に内風呂が普及していったことによる公衆浴場への影響について述べている。続いて第三章では、公衆浴場が「公的な空間」でありながらも、身体の洗浄や入浴という「私的行為」をするという矛盾について触れている。最後に、第四章では、大東文化大学社会学部の学生に向けてアンケートを行い、公衆浴場での行動は性別によって差が出るのか？という内容での分析結果と、性的マイノリティーも含めた安全な「性の境界」についての考察を述べている。